

フィンランドにおけるネウボラ、 プレイ・パーク、小学校の連携

中 島 千 恵

本論の目的

学校における児童の生活の充実、児童の学齢期に始まるのではなく、すでに誕生以前からの社会的ケアやサポートの在り方が、やがて児童期の生活に繋がってくる。その際、継ぎ目やギャップのない児童ケアのためには、諸機関が児童についてスムーズに連携し、ニーズを満たしていけることが重要である。学校外の児童福祉機関と小学校の連携の在り方について、フィンランドの例を考える。

日本では、欧米諸国に随分遅れてはいるが、ようやく、虐待の防止は妊娠前から始めることが必要であることが認識され始め、問題の所在でも述べるが、社会保障審議会の提言により、学校にも対応が求められている。また、日本では学童保育の拡充が急がれる。しかし、学童保育が拡充される方向ではあるものの、学童保育不足、学童保育の環境、学童保育の指導員など、課題も多い¹⁾。さらに、日本でも外国語を母語とする児童へのより充実した対応が保育所や学校現場に求められている²⁾。課題が山積する中、教員の負担は増大する一方である。国際的にも日本の教員の勤務時間が多いという調査報告が公表されている³⁾。学校や保育機関への期待から、学校教師の負担を増大していくのではなく、課題と責務を共有する学校外の諸機関の役割に目を向けることも重要であると考え。

このような考え方に基づき、フィンランドにおけるネウボラとプレイ・パークに着目した。ネウボラは医療を中心に児童に福祉ケアを提供するクリニックである。プレイ・パークは児童とその家族に遊び場などを提供する施設である。どちらも地域に根ざした施設である。フィンランドは、2009年の国際学力調査（PISA: Programme for International Student Assessment）で上位の成績を達成し⁴⁾、脚光を浴びるようになったが、近年、日本では、フィンランドのネウボラが国会でも取り上げられ⁵⁾、妊娠した時にプレゼントされる妊娠パッケージやワンストップの相談体制など、日本版ネウボラの取り組みが始まっている⁶⁾。

フィンランドには、英語でプレイ・パーク（現地の言葉ではレイッキピュスト：Leikkipuisto 渡邊は「児童公園」と訳している。）と呼ばれる公園を活用した児童のための場所がある。訪問したプレイ・パークのマネジャーによると、プレイ・パークには100年近い歴史があり、50年くらい前から月曜日から金曜日まで終日オープンするようになったとのことである。ヘルシンキには、2015年10月現在、65か所ある⁷⁾。プレイ・パークは、地域の子育て家庭に様々な場を提供しており、学童保育を担っている。それ以外にも子育て支援の多様な機能を担っている。学童保育を拡充する方向にある日本にとって、地域における子育て支援の多様な機能



タイバラティ・プレイ・パーク
2015 年筆者撮影

を果たしながら、学童保育も行うプレイ・パークは非常に興味深い。何よりも、緑あふれる広々とした公園で、のびのびと遊ぶ児童の姿は美しく、出来る事なら日本でも提供したい環境である。

ネウボラとプレイ・パーク、そして小学校は連携しているのだろうか。連携しているとしたら、どのように連携しているのだろうか。また、フィンランドでも外国語を母語とする人々の数が増加している。ネウボラやプレイ・パークはどのように外国語を母語とする児童や家族に対応しているのだろうか。現地スタッフへのインタビューを通して把握を試みた。

CINII で先行研究を調べてところ、フィンランドのネウボラにおける誕生から就学前の切れ目ない母子のケアや子育て支援に焦点を当てた医療、子育て支援、保育政策などの視点からの調査研究や、地方におけるネウボラのモデル事業に関する研究報告は既に多数存在する。小学校との連携については安藤（2007）が保育と保育政策を中心とする論文の中で触れているが、数行である⁸⁾。プレイ・パークとネウボラや小学校との連携を対象とした論文は見当たらない。プレイ・パークは地域の多様な子育て家庭に遊び場、子育て支援、そして学童保育を提供

する場である。学校外のこのような子どもの居場所と、誕生から就学前までの児童ケアをワンストップで行うネウボラ、そして小学校との連携を現地調査した研究は見当たらない。

なお、本研究に関わるインタビューはすべて英語で実施したため、提供された資料や収集した資料が英語の場合は、諸機関の名称などについては英語を記載する。フィンランドでは、高等教育は英語で行われるのが主流であるため、インタビューは、特に困難なく英語で進めることができた。また、公的機関のホームページや主たる報告書は英語版でも公表されている。しかし、現地でアクセスできる資料が英語に限定され、本報告書作成においても限界があることを筆者は認識している。フィンランド語でしか得られない情報による、より詳細な研究はフィンランド研究のエキスパートに委ねたい。

問題の所在

虐待の通報件数の増加、子どもの貧困率の高さ、親の雇用の不安定化、度重なる災害の発生など、日本の児童が置かれている社会環境は、全般的に悪化していると思われる。日本社会全体で、ありとあらゆる組織や団体が連携して、子どもたちとその家族を誕生前から切れ目なく支援する体制の充実を図ることに今まで以上にエネルギーを注ぐ必要がある。

近年、日本でも欧米における教育関心と足並みをそろえるかのように、文部科学省は「確かな学力の向上」を図る取組を実施し⁹⁾、学力向上が各教育委員会で語られるようになった。小学校への適応的な幼小連携も必要であろうが、まず第一に重要なのは、健康的な家庭で、子どもの健康な体と心が育まれることである。既に脳科学の研究でも、6歳までの生活環境、特に人間環境が脳の発達においていかに重要である

かは、伝えられている¹⁰⁾。幼児期と小学校との連携（幼小連携）から、誕生前から少なくとも義務教育終了まで、関連する諸機関の連携へと視野を広げていかなければならない。

厚生労働省の社会保障審議会は、2015年8月28日、児童虐待防止に関する専門委員会が報告書をまとめ、支援が必要な家庭に関する情報を小学校が幼稚園や保育所から引き継ぐことや、学校が要支援の妊婦に関する情報を市町村につなげるなどの提言をした¹¹⁾。また、「特定妊婦」と呼ばれる育児困難が予測される妊婦への対応を学校にも求めている。

ようやくこの提言が出てきた事、つまり、もっと以前からこのような対応がされてきていなかったことに驚く市民も少なくないのではないだろうか。しかし、また同時に、児童の学習以外の学校教員の負担が増大し、学習指導への影響や教師のバーンアウトを懸念する人もいるのではないだろうか。学校内の担任、養護教諭、栄養教諭、カウンセラーなどとの連携関係の見直しも必要かもしれないが、学校外の地域に根ざした諸機関とともに課題と責任を共有し、社会全体として児童の問題に対処していける合理的なシステムの開発が必要である。

医療機関や子育て支援機関との連携の重要度が更に大きいと考えられるのは、異文化を背景に持つ、外国籍の児童とその家族へのケアである。保護者が日本語や習慣はもちろん、社会システムや医療システムを知らない、出産や子育て、子どもの教育に関して智恵を提供してくれる親や親せきから遠く離れてしまっていることなどから、深刻な医療問題や教育問題に直面しがちである。しかし、親の社会適応や言語習得にまで、学校や保育施設が関わるのは無理がある。学校や保育施設と連携をとりながら、外国籍の児童や保護者への支援を柔軟に提供できる機関の充実も検討が必要である。

本論では、フィンランドにおいて地域に根ざし、地域の子育て家庭にサービスを提供するネウボラとプレイ・パーク、そして小学校がどのように連携して、乳幼児期からの児童ケアを行っているのか、特に異文化を背景に持つ児童とその家族への支援をどのように展開しているのか、調査結果を報告し、日本への示唆を検討する。

調査方法

1. 調査先と主たる質問内容

2015年8月17日から20日にかけてヘルシンキのネウボラとプレイ・パークを訪問した（表1）。インタビューに応じたスタッフは全員、市の公務員である。

(1) ケラバのネウボラ（8月17日訪問）

夏季、ネウボラは非常に忙しい時期で、ヘルシンキ市内の訪問予定のプレイ・パークに最も近いネウボラ訪問は難しく、ヘルシンキから北に27キロ離れたケラバのネウボラ訪問が実現した。ヘルシンキはヘルシンキ首都圏と首都圏の外にあるヘルシンキ地域（リジョン）から成るが、ケラバは、ヘルシンキ地域に含まれる。

ケラバ駅に降り立つと、日本であれば、閑静な緑の多いベッドタウンを連想するような町で、中心的な車道も花で美しく飾られていた。

表 1. 調査先とインタビュー対象者

| | |
|-------|--|
| 2015年 | |
| 8月17日 | ケラバのネウボラ (主任看護師/マネージャー) |
| 8月18日 | タイバラティ・プレイ・パーク (マネージャー、指導員2名) ヘルシンキ・幼児教育局 (幼児教育専門官) |
| 8月20日 | ムスタキビ・プレイ・パーク (マネージャー、指導員1名) |

約 30.62 平方キロ、人口 35,000 人ほどの町である。急激ではないが、人口は増加傾向にある。ネウボラでの説明によれば、ケラバでは 100 以上の言語が話され、かなり多様な文化背景の人々が住んでいるという。1998 年から 20013 年までの間にフィンランドの市民権を得た人を母語別に集計した統計データによれば、異なる言語 16 と「その他」の言語が掲載されている (City of Helsinki, 2014,p.18)。しかし、中国語だけでもその中に多様な中国語があり、詳細なデータを得るのは困難である。また、フィンランド国籍を持たない人口の割合は増加傾向にあり、2014 年には 8.6% である。ヘルシンキには、ヨーロッパ系、アフリカ系、ラテン系、アジア系、オーストラリア・オセアニア系などの人々が在住している (City of Helsinki, 2014,p.17)。100 以上の言語が話されていると感じたとしてもおかしくない状況である。

ネウボラには、事前に質問を送付し、それに従いながらインタビューに応じて頂いた。主任看護師 (ヘッドナース) 兼マネジャーのヘリ・ハマレーネン (Heli Hämäläinen) 氏にインタビューをした。

質問は大きく①ネウボラに関する歴史など、②財政、③多文化化する社会における支援、④児童の移行のための連携、⑤スタッフの職能開発の 5 つの内容について質問した。本報告はこれら 5 つの質問項目のうち、③④に対する回答を中心に報告する。

(2) タイバラティ・プレイ・パーク (8 月 18 日)

タイバラティ・プレイ・パークは、市の中心部に近いが、公園に囲まれ、落ち着いた環境にある。タイバラティ・プレイ・パークについては、日本でも既に石橋らによって、学童保育を担う場所として紹介されている¹²⁾。よって、ここでプレイ・パークの仕組みなどについて詳



ケラバのネウボラ：病院の一角にネウボラがある
2015 年筆者撮影

細を述べることは避ける。学童保育はプレイ・パークが果たす役割の一部であり、年間を通して地域の多様な子育て家庭が活用できる場である、より大きな社会的役割を果たしている。学校終了後、登録されている児童を対象とする学童保育の他に、午前中は赤ちゃんのための音楽教室などを提供しており、お父さん、またはお母さんが赤ちゃんを連れてやってくる。中、高生も午後から夕方にかけてやってきて、遊んだり、ユース・クラブの活動をする。施設は基本的には地域の人々に開放されており、地域の人々が幼い子どもを連れてやってくる。地域の誰でもが、子どもの遊びの場として活用できる、まさしく、プレイ・パークなのである。よって、フィンランドのプレイ・パークを日本の学童保育の狭いイメージで語ることはできない。渡邊が紹介するように、基礎教育法において、学童保育の目的のひとつとして「社会の平等を促進し、社会的疎外を排除し、社会的包摂を促進すること」と定められている。学校外にあるプレイ・パークはまさしく子どもを通して、地域の様々な人々を包摂する場として機能しているのである¹³⁾。

インタビューは、本プレイ・パークのマネジャー (Anja Virolainen 氏) とスタッフ 2 名を対象に、ネウボラ、小学校との連携について話

を聞いた。スタッフの1人は指導員の Sanna Mäkinen 氏とやはり指導員で幼稚園の先生でもある Marja Torsti 氏である。通常はマネジャーは複数のプレイ・パークを統括しており、現場にはいない。また、現場には、インタビューに応じて下さったスタッフ以外にも、ユース・クラブの指導員である男性スタッフ2人がいる。

(3) ムスタキビ・プレイ・パーク (8月20日訪問)

異文化を背景に持つ人が多い地域のプレイ・パークとして、ムスタキビ・プレイ・パークを訪問した。本プレイ・パークは、ヘルシンキ中心部から地下鉄で15分程度離れた地域にある。緑あふれる広々とした公園の一角にあり(写真)、徒歩10分ほどのところには、水泳ができる美しいビーチが広がっている。訪問したのは、8月の下旬である。残り少ない夏を存分に楽しもうとする親子の姿や夏の太陽をのんびり浴びるお年寄りの姿などがあつた。

本プレイ・パークのマネジャーであるジャン・キルマーマ (Janne Kylmämaa) 氏と本プレイ・パークの活動を統括するチームリーダーのマリヤ・ニガルド (Marja Nygard) 氏に話を聞いた。チームリーダーのニガルド氏は、ソーシャル・ケア・ワーカーである。他にスタッフとして、保育士が1人、ソーシャル・ケア・ワーカー1人がいる。

質問の内容は、①本プレイ・パークでの取組、②移民の児童や保護者への対応、③他機関との連携で、本報告では、②、③を中心に報告する。

調査結果

1. ネウボラ (Neuvola)

(1) ネウボラとは何か

まず、ネウボラとは何なのか、どのように形

成されてきたのか、若干の説明を加える。

ネウボラは、地域の児童福祉クリニックまたは妊婦または幼い子どものいる家族のヘルスケア・センターと表現するのがわかりやすい。スタッフは看護師の資格を有し、就学までの児童が健全な家族生活の中で育てられるように母親の妊娠中からヘルスチェックをし、誕生後は健全な子育てができるように医療ケアを通して支援し、コーチする。ケラバのネウボラは医療施設に付設されており、病院とドアひとつでつながっている。

ネウボラと呼ばれる児童福祉クリニックのシステムを導いたのは小児科医アルボ・ウルポ (Arvo Ylppö: 1887-1992) である。ベルリンとヘルシンキで医学を修めた彼は、フィンランドにおける赤ちゃんの死亡率が高い事を憂慮し、どの町にも、地域のヘルス・ケア・センターを設置する必要があると確信した。1949年、初めてヘルス・ケア・クリニックが設置された。

妊娠期からワンストップのサービスを提供すること、また、たとえ貧困で医療ケアを受けることに不安な親でも妊娠したらきっとネウボラを訪問しやすい仕組みをつくることによって、子育て支援の充実を図り、早期から虐待防止に取り組んでいることである。その仕組みとは、妊娠すると送られるプレゼント(赤ちゃんの衣類などのセット、または現金)である。衣類などのセットは、英語で「妊娠パッケージ (Maternity Package)」と訳されている。経済的に苦しい家庭にとってこの補助ありがたいことは言うに及ばない。

(2) すべての妊婦ケアを促進する「妊娠補助金 (Maternity Grant)」の仕組み

妊娠すると補助が出る仕組みは、1937年の妊娠補助法 (Maternity Grant Act) の施行に始まる。翌年の1938年に最初の補助金提供さ



奥の一室でスタッフが電話に対応している。
2015 年筆者撮影

れた。当初、低所得層の妊婦のみを対象としており、補助金を受け取れたのは、妊婦全体の3分の2であった。金額は、赤ちゃん一人に対して当時の工場労働者の平均月給の約3分の1より若干良い額が支給された。妊娠補助金は、物品、現金、そしてその両者の組み合わせの3通りで受け取ることができた。

妊娠補助金の制度は、出生率の低下と高い乳幼児の死亡率によって加速化され、1949年、すべての妊婦が受け取ることができるようになった。重要なのは、これによって、すべての妊婦が公的なヘルスサービスを受けなければならない仕組みを創ったことである。妊婦は、妊娠補助を受けるためには、必ず1回は、クリニックを訪問しなければならない。そして、ヘルスチェックや家族に関する質問などに答えなければならない。この制度の充実もあり、フィンランドにおける乳幼児と妊婦の死亡率は低い状態を長い間維持しているという。近年は、毎年、約60,000件の妊娠補助金のうち、40,000件はパッケージが選択されている。

1994年、妊娠補助金の管轄は、全国社会福祉協議会 (the National Board of Social Welfare) から社会福祉機関であるケラ (Kela) に移された。

(3) ネウボラにおける児童ケアの仕組み

ネウボラにおけるケアは家族すべてが対象になっており、それが医療だけでなく、虐待防止など児童の安全も含めた家族ケアもする。そのひとつとして、ネウボラは家族のコーチングもする。では、どのようにネウボラが医療ケアと同時に児童ケアに対応するのだろうか。一般的なプロセスは法令に定められ¹⁴⁾、ネウボラにはほぼ共通しているが、ネウボラの規模によって訪問回数は若干異なる。インタビューから得られた本ネウボラの仕組みは以下の通りである。

まず、妊婦補助を受け取るために、妊娠中に少なくとも1回は、ネウボラを訪問しなければならない。しかし、実際には、妊娠中はほぼ毎月、ネウボラを訪問することになるという。訪問できない人には、電話サービスも実施している。訪問したネウボラでは、毎日、お昼に1時間、電話対応する時間を設定している。写真は奥の部屋で電話対応しているスタッフの様子を遠くから写している (写真)。また、ネウボラは朝8時から夕方4時までオープンしているが、昼間の訪問ができない親のために夕方の訪問にも対応している。

フィンランドでは法律で、子どもは6歳まで医療ケアを受けなければならない事が公衆衛生法¹⁵⁾に定められている。初めて赤ちゃんを授かる父母には、赤ちゃんが生まれると生活がどのように変わるかなど、生活の変化と対応についてアドバイスが入る。子どもが誕生する前、つまり出産までに4回、出産後に4回、合計8回親子は家族一緒にネウボラを訪れなければならない。訪問した日も、子どもを連れた母親とその父親が訪問していた。

フィンランド国籍であれば、この時の医療費は無料である。1回目の訪問は、2時間くらいをかける。その後の訪問は30分程度で終了する。子どもには30分から45分をかける。1歳

と5歳で子どもは発達などの様子を知るためのスクリーニングのテストを受ける。1歳では1時間から2時間をかけ、5歳では2時間ほどかかる。

ケラバには2つのネウボラがあり、7人から8人の看護師が配置されている。看護師一人が担当する子どもの数は大体、200～250人、妊婦は30人くらいだという。筆者にはこれが多いのか、少ないのか判断ができないが、これだけの人数に対して最初の訪問について、2時間くらいかけるというのは、日本で子ども2人を生み育てた筆者の経験からは、考えられない丁寧な対応である。日本では、2時間待って、長くて15分の診察ではないだろうか。

妊娠中の訪問で配慮されているのは、人の援助や近くに助けてくれる人がいない人たちが、子どもの出産までに助け合える人と出会えるようにすることである。そのため、グループで話し合う機会をつくっている。ケラバでは、外国語を母語とする家族も少なくないが、ネウボラのスタッフは、フィンランド語か英語でしか説明ができない。そのため、グループでのセッションが役立つのだという説明であった。

(4) ファミリー・コーチング：子どもの家族みんなのことをわかっている

子どもが4歳でネウボラ来ると、親には様々な質問がされる。飲酒、睡眠、生活環境、最近の変化など、家庭環境が子育てに適切か、保護者が適切に子育てをしているか、養育力がどの程度あるかなどがチェックされるのである。それらの質問項目は、ガイドラインのように一冊の本にまとめられており（写真）、ネウボラのスタッフはそれに従ってチェックしていく。かなり細かな項目まで記載されている。質問は、妊娠中の気持ち、赤ちゃん誕生への期待、妊娠前と妊娠後の飲酒習慣の変化なども含まれ



健康チェックのガイドブック

る。これらの質問は、基本的にヨーロッパ幼児期促進プロジェクト（仮訳）（European Early Promotion Project）において作成された質問に基づいている。このプロジェクトは、保護者が親としての新たな状況に適応するのを支援することによって、子どもの精神的トラブルを防ぐことを目的としている。2014年の統計データから計算¹⁶⁾すると、ヘルシンキの子どもがいる家庭の32.3%は片親家庭、14.8%は未婚のカップルである。乳児からの子どもの精神的トラブル防止の取り組みは重要である。

虐待が発見されたら、社会福祉機関とコンタクトを取り、社会福祉関係者が家庭を訪問する。そしてその家庭訪問の際の判断に応じて、健康ケアの対応をするか、深刻な場合、里親に子どもを移すなどの対応がされる。飲酒の問題があるなら、ドクターにつなぐ。基本的には、すべてのセラピストと連携を持っている。

また、子どもが1歳と5歳で受けるテストでは、言語上の問題、行動上の問題、障害などの問題などがないかチェックする。問題を見いだしたら様々なサービスを提供する。「早期に見いだし、早期にサービス提供」が基本的考え方

である。

ファミリー・コーチングでは、いつも親が喜ぶ関わりだけではない。子どもの問題は簡単ではない。アドバイスの内容によっては、親が怒りだし、ドアをピシャッと叩きつけるようにして帰る親もいるという。しかし、たいていの場合、自分達の生活を振り返り、次の訪問には協力的になるという。大事なのは、親の養育力を確認し、養育力の向上を支援することである。そのための基本的考え方は、「子どもの家族みんなのことをわかってる。」である。子どもの健康だけでなく、子どもをとりまく家族、みんなの健康や生活状態を把握し、家族全体の支援を通して、子どもの健やかな発達を支援しているのである。

(5) ファミリー・ワーカー

本ネウボラには、ファミリー・ワーカーと呼ばれるスタッフが2人いる。かれらはネウボラを訪問する家族を支援するソーシャル・ワーカーである。しかし、あえてソーシャル・ワーカーとは呼ばない。ソーシャル・ワーカーに対する世間一般のイメージがあまり良くなかったため、呼び方が変えられたいきさつがある。インタビューに応じてくださったハマレーネンさんの祖母は、良く言っておられたそうである。「ソーシャル・ワーカーのお世話になるようになったら、人生も終わりだ。」と。この話を聞いた瞬間、筆者の父親も生前は福祉のお世話になることは恥だと言っていたことを思い出した。日本でも、まだまだこのような意識の世代は多いかもしれない。日本でも福祉サービスに対するネガティブなイメージを払拭するための取り組みも必要かもしれない。

(6) ネウボラと小学校との連携

ネウボラの記録は、児童が7歳で小学校就学

するまでにスクール・ナースに送られ、情報を共有するためのミーティングを持つ。子どもの状況に応じて、担当教師と直接、話すこともある。また、教師と情報を共有するミーティングも持たれる。日本はクラス担当教師が児童の入学直前に決まり、児童について情報を伝える際に幼小連携がとりにくいという制度的欠陥を抱えている。フィンランドでは8月中旬に新学期が始まるが、5月には誰が担任になるかネウボラではわかっているという。

学校へは3つの記録が送られる。家族、児童、親の3つである。ネウボラで記録された、健康に関する記録、親へのインタビュー結果など、すべてが記録され、スクール・ナースに送られるのである。1歳、5歳で子どもが受けたテストによって問題が発見された場合も、スクール・ナースに書類が送られ、教師と直接、情報を共有することもある。

(7) 移民家族への対応

ヘルシンキ幼児教育局では、ヘルシンキには最初、チリから初めて移民の人々が訪れ、次にベトナムからポートピーボーがやってきたと説明を受けた。しかし、その後20年、厳しい法律のもと、移民はほとんど受け入れられなかったという。しかし、ここ10～15年の間、移民は増加傾向にある。ヘルシンキのどこか1か所だけでも、70くらいの異なる文化背景の外国人が居ると言う。

移民家族に対しても、ネウボラはサービスを提供している。しかし、フィンランド国籍を得ている人たちとはサービスを受けられる条件が異なる。

ケラバに在住する外国人またはフィンランド以外の文化背景を持つ人々が多いのだが、本ネウボラにやってくる外国人たちで比較的対応する割合が高い人たちを挙げてもらったところ、

隣国のエストニアそしてトルコであった。エストニアの人々とは英語でコミュニケーションができ、言語上の問題はあまりない。しかし、トルコから来る女性の多くは仕事ではなく、結婚でフィンランドに来るらしく、フィンランド語や英語があまりできず、コミュニケーションは通訳を介して行わなければならない。そのため、ケアが大変難しく、大きな問題だという。ドメスティック・バイオレンスもあるが、女性はそれを訴えられない、または訴えないことも問題であると説明された。

費用については、政府間合意があり、EUのメンバー国の人でなければ費用は無料にならない。ヘルスケアをどこで受けるかは、自分で選べるのであるが、政府から提供されるコスト以上のものは自分で支払わなくてはならない。EUのメンバー国の人であれば、その国に請求書が送られる。ただし、配偶者がフィンランドで労働するかどうかでも、状況は変わる。ネウボラの対応としては、最初に誰が費用を支払うのかを確認する。夫が1年以上フィンランドで働くのであれば、妻も社会保障が提供され、ネウボラで無料のケアを受けられる。

ロシア人の場合、EUのメンバー国でないため、ネウボラのサービスを受けるための手続きに時間がかかる。フィンランドには私的クリニックがほとんどないので、ネウボラのサービスを受けられないと厳しいという。アフリカから来た人々にとっても妊娠後ネウボラでケアを受けるのは厳しい状況がある。ネウボラでは、最初一定の額を支払ってもらってからケアにあたる。出産の場合、本ネウボラでは、現在、4500ユーロ（1ユーロ140円として、約630,000円）。ネウボラ1回の訪問に徴収される費用は70ユーロ（約9800円）である。

移民家族向けの特別なプログラムや取り組みは説明されなかった。移民の家族がかかえる言

語上の問題などに対応しているのは、次に述べるプレイ・パークである。

2. プレイ・パーク (Leikkipuisto)

ヘルシンキには50以上のプレイ・パークがあるのだが、そのうち、10~15のプレイ・パークが親業に関するコースを提供している。週に2回、1日3時間コースである。無料で、3年ほど前から始められている。

(1) ムスタキビ・プレイ・パークの取り組み

移民の多い地域にあるムスタキビ・プレイ・パークでは、ロシア、ソマリア、エストニアからの移民の人々が多いが、その他に、アフガニスタン、イラク、シリア、クルド、アルバニア、コソボなどの地域から来ている人々もいる。全体で15の異なる文化背景の人々がこのプレイ・パークを利用している。ほとんどの子どもは既に幼稚園レベルなので、フィンランド語も学ぶ機会があり、言語の問題はさほど深刻ではない。子どもは遊びを通して言語を早く吸収する。また、小学校で移民の子ども対象の1年間のフィンランド語の準備教室を提供している。しかし、問題は、先ほどネウボラでも指摘されているように、母親である。家にこもりがちで、フィンランド語の吸収が遅い。そこで、ムスタキビ・



ムスタキビ・プレイ・パークの入口
2015年筆者撮影

プレイ・パークでは、フィンランド語教育のプログラムに力を入れている。

言語だけではない。一部の地域には、当局や警察を信頼できない人々もいるという。それは、これらの人々がフィンランドに来るまでの経緯に警察を信頼できなくなる、何かがあったのであろう。プレイ・パークのスタッフは、これらの人々から信頼してもらえるように努力している。また、彼らのカルチャーも理解するようにしているとのことであった。

ムスタキビ・プレイ・パークでは、住民がここを自分の場所だと感じることを大事だと考えており、夏休みには、お昼にプレイ・パークにくる家族に無料でスープを提供している。時には、お誕生会などの私的な活動にも場所を提供している。ただし、私的目的での施設利用は有料である。

(2) 午前と夕方の活動に組み込まれた親支援

小学校の児童がやってくるまでの午前中には、地域の小さな子どもと保護者を対象とするプログラムが準備されている。月曜日の午前は「ファミリー・カフェ」と呼ばれ、家族で料理したり、専門家による講演（月に1回程度）などがある。火曜日には、デイケアの準備として親なしのプレイ・クラブが提供されている。木曜日には、ミュージック・クラブが希望に応じてアレンジされる。水曜日と金曜日には、親業に関するフィンランド語のコースを提供している。午前の取り組みでは、プレイ・パークの屋内施設である小さな部屋やキッチンが解放される。訪問した日には、服装から異文化を背景とすることがわかる母親がスタッフとフィンランドの鮭料理などを作っていた。

通常、プレイ・パークのスタッフは、夕方には、プレイ・パークを退出する。しかし、それ以降もプレイ・パークの施設は稼働している。



ムスタキビ・プレイ・パークのキッチン
2015 年筆者撮影

ムスタキビ・プレイ・パークでは、月曜日から木曜日まで、夕方、保護者達の集まりに活用されている。スタッフは活動する人達に鍵を渡して退出する。たとえば、水曜日はロシア系の家族がフィンランド語を学ぶために活用している。金曜日は、スペイン系の家族が活用している。フィンランドには、家族のために多様な活動をアレンジするマンネル Heim 児童保護協会（MLL: Mannerheimin Latensuojeluliitto）と呼ばれる大きな NGO がある。夕方以降のプレイ・パークにおける家族を対象とする様々な活動の中には、このような大きな組織が関与しているものもあり、ムスタキビでは、火曜日は、MLL が関与した活動が入っている。

(3) ネウボラとプレイ・パークの連携

次にネウボラとプレイ・パークとの連携について知り得た範囲で報告する。タイバラティのプレイ・パークのスタッフによると、大抵のネウボラでは、プレイ・パークにも行くようにアドバイスするそうである。

プレイ・パークとネウボラはコーポレート・パートナーズであり、年に2回、ミーティングを開催し、情報を共有する。ネウボラからは、新生児を持つ家族の e-mail アドレスが知らされ、プレイ・パークは、子どもに関する学びを

提供する会やその他の特別なタベへの招待状をこれらの家族に送る。

(4) プレイ・パークと小学校との連携

タイバラティ・プレイ・パークの役割は学童保育だけではないが、小学校が終了してからの午後には、主に近隣の4つの小学校から学童保育に登録している児童達がやってくる。その他にフレンチ・スクールから1人、ドイツ・スクールからも1人来ているとのことであった。プレイ・パークは、一年に1回、秋に小学校の校長とミーティングを持つ。新しく小学校に入学する児童について少しわかっている段階でミーティングが開催されるのである。ミーティングには、校長、スクール・ナース、コーディネータ、学校心理士、特別支援教員が含まれる。コーディネータは、児童に問題などがあれば、諸機関との連携をコーディネートする人である。

8月に小学校が始まると、プレイ・パークのスタッフは、小学校に赴き自己紹介をする。児童に対して両者の連携が明示されるわけである。そして、小学校1年生については、安全のため、小学校まで迎えに行き、プレイ・パークにつれてくる。

(5) 学校における放課後の活動としての学童保育との違い

日本の学童保育が学校の敷地内にあるのに比べ、フィンランドの学童保育は学校の中にも外にもある。学校内は移動がなく、安心であるが、学校外で行うメリットもある。児童が気分の転換をすることができる利点がある。しかし、別の重要な事情がある。ムスタキビ・プレイ・パークの場合、近隣の小学校には、放課後のクラブ活動が1つしか提供されておらず、放課後学校にいられるのは25人程度だという。しかも、有料である。クラブ活動を外部委託しているた

めである。ヘルシンキ市の放課後の活動に関するパンフレット（2015-16年度版）によれば、活動が午後4時に終わる場合、月40ユーロ、5時に終わる場合、月100ユーロとある¹⁷⁾。その点、プレイ・パークで指導員と施設が整った環境で過ごすことは無料である。プレイ・パークは、おやつ代は徴収するが（1人、1カ月大よそ36ユーロ（約5040円）、その他は無料である。必要な予算は公費でまかなわれる。タイバラティ・プレイ・パークでは、目下のところ、週に1回、運動時間として学校を利用する。これには保護者も来る。つまり、多くの児童にとって、料金など関係なく、放課後自由に遊ぶ、自由に宿題をし、保護者が迎えにくるのを待てるのは、プレイ・パークなのである。

考察

以上、1か所のネウボラと2か所のプレイ・パークにおけるインタビューで得られた連携の取り組みや外国語を母語とする児童や家族への対応について報告した。調査の結果、次の4点が継ぎ目のない児童ケアにとって重要であると考えられる。第1に、ネウボラが単に訪問者の医療ケアやたまたまの保護者からの相談に乗るという消極的な関わりではなく、定期的訪問スケジュールとともに、共通の質問項目に基づき、家族の養育力の確認に時間をかけ、積極的働きかけと支援を行っていることである。第2に、継ぎ目のないケアに向けた情報提供であるが、保護者の情報も含まれることである。筆者が参加した日本のある教員研修で、小学校の先生たちから、保育所や幼稚園から保護者の情報がほしいという声がでた。保護者のことがわからず、児童理解に時間がかかってしまうのだ。ネウボラは就学前までの児童とその家族のケアを担当するが、児童だけでなく、家族すべての面接記

録を小学校に送る。また、プレイ・パークから地域の子育て家庭すべてに案内が送られるように、ネウボラからプレイ・パークへ家庭の連絡先が送られる。継ぎ目のないケアとひとつの家庭も取りこぼさないケアを目指しているのが感じられる。第3に、必要に応じて、移行期における小学校担任との話し合いが、比較的早期に行われることである。日本の幼小連携では、担任が3月のぎりぎりまで決まらず、担任は余裕のないまま新学期を始めてしまう。さらに、第4の点として、児童を取り巻く諸機関の連携の一部にすぎないが、インタビューを通して推察できるのは、これらの学校外の組織による児童のケアや家族支援は、学校の負担軽減に大いに役立っているのではないかということである。今回、小学校へのインタビューはできなかったが、ネウボラによる乳幼児期のファミリー・コーチングは保護者の養育力を高め、小学校入学までに健康な家族生活と学びやすい家庭環境の準備へとつながる。また、学童保育が学校の敷地内で行われるのと、プレイ・パークのように学校外で行われるのとでは、学校の負担は大いに異なるのではないだろうか。

フィンランドの例は、負担が一カ所に集中することなく、地域の諸機関が児童の教育とケアの責任を適切にシェアし、継ぎ目のない、合理的かつ効果的な連携の在り方を開発できることを示唆していると考ええる。

謝辞：インタビューに快く応じてくださったネウボラ、プレイ・パークの皆様にご心よりお礼を申し上げます。また、今回の調査先は、日本のフィンランド・インスティテュート（在東京）を通して訪問の約束を取り付けることができた。フィンランドでは夏休みが終わり、新学期が始まった直後で、訪問を取り付けるのが困難な時期であった。にもかかわらず、訪問することが

できたのは、ひとえにフィンランド・インスティテュートとそのプログラム・コーディネータであるマリアンヌ・マニネン氏のお力添えのおかげである。彼女の献身的とも言えるご協力と、親しみ溢れる人間的な関わりに心から感謝申し上げます。

引用参考文献

- 1) 松村祥子、野中賢治編著 (2014)、『学童保育指導員の国際比較：放課後児童クラブの発展をめざして』、中央法規。学童保育指導員専門性研究会『学童保育研究』5 (2004, 11) 特集学童保育の専門性と指導員の資格化、10 (2009, 11) 特集学童保育実践・研究の現代的課題、13 (2012, 11) 特集、指導員の専門性をめぐる理念・実践・運動、かもがわ出版。
- 2) 文部科学省は、『外国人児童生徒受け入れの手引き』（平成 23 年 3 月）を作成し、学校の体制、学校管理職の役割など、学級担任だけでなく、全学校が対応できる体制も含めた手引きの内容を全国の学校に示している。
- 3) OECD 国際教員指導環境調査 (Teaching and Learning International Survey) 2013 年調査結果。本調査結果のポイントは文部科学省のウェブページから閲覧できる。
- 4) 文部科学省「OECD 生徒の学習到達度調査～2009 年国際調査結果の要約～」参照。文部科学省のホームページより閲覧可能。
- 5) 2014 年 6 月の第 186 回国会厚生労働委員会では、既に全国で 40 か所を公募し、フィンランドのネウボラをモデルとした事業の推進に取り組んでいることが述べられている。また、2015 年第 189 回国会本会議 (2 月 17 日) や予算委員会 (3 月 10 日) でも、日本版ネウボラの整備を全国的に推進するための具体的展開などについて議論されている。
- 6) 朝日新聞 (朝刊) (2015, 2 月 25 日)、「悩むママの味方「ネウボラ」」29 面には、三重県名張市、千葉県浦安市などの自治体における取組例が紹介されている。
- 7) 'Playgrounds in alphabetical order' (ヘルシンキ市

- のホームページ) で数を確認。
<http://www.hel.fi/www/helsinki/en/day-care-education/play/playgrounds/playgrounds-a-z/> (2015年10月3日アクセス)
- 8) 安藤節子 (2007)、「フィンランドにおける保育と子育て支援—保育と家族政策を中心に—」 聖園学園短期大学 研究紀要第37号、25－37頁。
 - 9) 文部科学省のホームページには、平成23年から文部科学省が実施している「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」の結果が掲載されているが、本調査の趣旨は、全国的な学力水準の底上げを図ることにある。平成26年は、学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究に焦点が当てられている。
 - 10) Jack P. Shonokoff and Deborah A Phillips, Eds(2000), FROM NEURONS TO NEIGHBORHOODS: THE SCIENCE OF EARLY CHILDHOOD DEVELOPMENT, National Academy Press.
 - 11) 社会保障審議会児童部会 (2015)『児童虐待防止対策のあり方に関する専門委員会報告書』
 - 12) 石橋裕子、糸山智栄、中山芳一 著、庄井良信 解説 (2013年)『しあわせな放課後の時間 デンマークとフィンランドの学童保育に学ぶ』、高文研。
 - 13) 渡邊あや (2009)「フィンランド—社会的包摂の一翼を担う学童保育」、池本美香編著『子どもの放課後を考える』、勁草書房、75頁。渡邊によれば、基礎学校法に記載される学童保育の目的は次の3つである。「・学校と家庭の教育活動と、子どもの情緒的安定を支援すること。・子どもの福利及び社会の平等性を促進し、社会的疎外を排除し、社会的包摂を促進すること。・子どもたちが、職務に相応しい人材に見守られながら、多様な活動・余暇活動に参加したり、落ち着いた環境の下でくつろいだりすることを可能にすること」
 - 14) Neuvolatoiminta,kouu-ja opiskeluterveydenhuolto sekä ehkäisevä suun terveydenhuolto. Asetukset (380/2009) perustelut ja soveltamisohjeet. Sosiaali- ja terveysministeriö, Julkaisuja 2009.20. 英語では、Maternity and child welfare, school and student health care and preventive oral health care. Grounds and application directives for Decree (380/2009). また、より具体的な実施方法についても次の本に示されている。Terveystarkastukset lastenneuvolassa & kouluterveydenhuollossa, menetelmäkäsikirja. Terveysten ja hyvinvoinninlaitos, 2011.
 - 15) Kansanterveyslaki, 1972.
 - 16) City of Helsinki (2015), STATISTICAL YEARBOOK OF HELSINKI 2014, 2015.2.20 (http://www.hel.fi/hel2/tietokeskus/julkaisut/pdf/15_02_20_Statistical_yearbook_of_Helsinki_2014_Askelo.pdf/)
 - 17) City of Helsinki, Afternoon Activities for School Children: School Year 2015-2016. (ヘルシンキ市が出している学校における放課後活動に関するパンフレット)

